

再配達

知花 沙季

「お届けものです。」

ピンポンとベルが鳴る。頼んでいた再配達に違いない。

「はあい、ただいま出ます。」

玄関を開けると、すらりとした青年が立っていた。古びた茶色い革の靴を二つ、左腕にかけている。靴の一つは口がぽっかり開いていて、もう一つはチャックがぴたり閉められている。

「星さんのお宅ですね。お届けものは娘さん宛でお間違いなかったでしょうか。」

青年はハキハキとした、澄んだ声で尋ねる。

「はい、そうです。どうしたら良いでしょうか。」

「娘さんは、いらっしゃいますか。」

二階の自分の部屋にいるはずの千夏(ちなつ)を玄関から呼ぶと、階段をタタタッと軽快に降りて、千夏が玄関に来た。青年が千夏に挨拶する。千夏は笑顔でこんにちはと返す。手帳を見ながら青年が聞く。

「お届けものは、『小学校の体育祭』で、お間違いなかったでしょうか。」

そうだ。千夏が喜ぶかなと思って頼んだのだ。世界的に流行(はや)った感染症の拡大が一向に収まらなかったせいで、二年連続で千夏の体育祭が中止になってしまった。最後の二年間、体育祭を経験できないまま、千夏は卒業して中学生になってしまった。千夏は運動が大好きで、特に走るのが得意で、あるはずだった体育祭では、高学年、すなわち五、六年生の生徒だけで行われるクラス対抗リレーの選手にも選ばれていた。千夏は低学年の頃から、高学年の生徒だけで行われるそのリレーに出たいとずっと言っていて、頑張って選手にも選ばれたのに、結局走ることはできなかった。体育祭の一ヶ月前になれば、

「ママ、しっかり見てて！ ビデオも撮って！ 何人も追い越すんだから。」

が千夏の口癖だった。千夏にその体育祭を経験させてあげたかった。

はいそうですと答えると、青年は腕にかけていた、閉じていた靴のチャックを開いた。革の匂いが漂う。

「この靴に、手を入れてください。中に入っている何かを探すよう意識して。」

急に何を言っているのか分からなかった。が、青年の指し示すままに千夏と一緒に靴に手を入れて中を探ろうとすると、途端、身体が靴に吸い込まれるような感覚を覚えて、すうっと回りの風景が変わっていくのが分かった。

人混みの中にいた。小学校の校庭。すこんと晴れ渡った空。

「生徒、入場。」

マイクを通したアナウンスが突然流れて、次の瞬間、太鼓やらラッパやらが盛大に鳴り響き始めた。その中を生徒たちが行進して来るのが見えた。体育祭だ。思わず千夏はどこかと探す。親たちが自分の子の名前を呼ぶ声があちこちで聞こえる。

小学生の千夏が、バトンを左手に、両腕をぶんぶん振って、全身を必死に動かして走っているのが見えた。前を走る他のクラスの生徒との距離をぐんぐん縮めていく。そうだビデオを撮らねばと、持っていた携帯でビデオを起動して、駆ける千夏に向ける。

「千夏〜！ あと少し、頑張れ！ 頑張れ！」

千夏が前を走っていた生徒の右に並び、そして抜いた。すごい、千夏。興奮し、自分の目尻まで涙が滲むのが分かった。次の走者にバトンを渡してやり切った表情を浮かべた千夏は、観客席を見渡して私の顔を見つけ、そして満面の笑顔を私に向けた。よく頑張ったと、千夏にガッツポーズを向ける。

お決まりの、校長先生の長い話を盛り込んだ閉会式も済んで、体育祭が終わった。千夏と体育祭のハイライトを振り返りながら、千夏すごかったね、夕飯は何が食べたい？なんて話しながら家の玄関まで着くと、あの青年が二つの鞆を左腕にかけて立っていた。青年は帰ってきた私たちを見て、開いていた鞆の口を一つ、静かに閉じた。

千夏の笑顔から、体育祭での成功を感じ取ったのだろう。青年はにっこりとして言った。

「おかえりなさい。笑顔が見られて嬉しいです。良かった。」

体育祭の余韻に浸っていたが、思い出した。再配達してもらったのだ。

「ありがとうございます。千夏にとっても私にとっても、一生の思い出になりました。良かったら、うちでお茶でもどうぞ。大したものはないのですが。」

青年はしばらくの間、私が淹れた紅茶を飲みながら、疲れてソファの上で眠っていた千夏の方をその黒い瞳でじっと見ていたが、やがて白い肌にすっと切れ込みを入れたような赤い唇を微笑ませて口を開いた。

「本当に良かったです。実はね、僕の再配達は、千夏ちゃんで最後なんですよ。」

「そうなのですか！ なぜ。」

「少し長くなるかもしれませんが、それでもお聞きしてくださいませるか。」

青年はゆっくりと語り始めた。

「僕は高校の頃、病気をしたんです。原因が今でも明らかになっていない、大きな病気でした。ある時から熱が下がらなくなって、最初は風邪かと親も自分もさほど心配していなかったんですが、一ヶ月経っても熱が引かなくて。それで精密検査を試みたら、命に関わる病気です。一、

二年ほど、学校には行けず病院でひとり、闘病を続けました。」

「…そうだったのですね。なんだか、思い出さなくないことを思い出させているようでしたら、ごめんなさい。無理はなさらないで。」

青年は全然大丈夫ですよ、お気になさらずと、穏やかな表情で続ける。

「でもやっぱり、寂しかったんです。楽しみにしていた修学旅行に行けなかったこと。高校時代の青春を、思い描いていたように過ごせなかったこと。僕は高校で大恋愛だって経験する予定だったのに。」

冗談めかして青年は言う。この青年は強いと、感じる。

「最初はただ、その寂しさと、もし自分も自分が思うように経験をできていたら、という未練が、つまりは自分のエゴが、この仕事、経験の再配達を始める動機だったんです。」

眠る千夏を見ながら、いや、実際には何も見えないような定まらない目線のまま、青年は言葉紡ぐ。

「沢山の人が喜んでくれた。本当はする予定だったけれど、予定していなかった何かのせいで実際にはできなかった、そういう経験を、その時の自分となって、経験することができる。感謝されて、やりがいもある仕事でした。」

「そうですね。千夏も私も、貴方のおかげでとても喜んでます。なぜ辞めてしまうんです。ぜひまたお願いしたいと思っていたのに。」

思わず青年の言葉を遮る。

「やっているうちにね、気付いたんです。人は経験を、時を取り込む生き物なんだと。今ある僕にも、今ある貴方にも、目には見えないけれど、その人の後ろにはーいや、中、とか、内側、が適切な表現でしょうかーその人だけの経験が、時が、確かに刻まれているんです。」

「…それなら尚更、経験を色々とできた方が良くはないですか。」

言っていることが分かるような分からないような混沌とした感情を抱きながら、思ったままに尋ねる。

「僕も最初はそう思っていました。でもね、実は違う。少なくとも、再配達を何度もやってきた今の僕は、違うと思っています。」

青年は窓の外ー夕空を飛ぶ鳥だろうかーをぼんやり見ながら続ける。

「人はね、ただ経験や時を取り込むだけではないんです。人は振り返って、意味を見出すことができる。過去を、今の自分によって、捉えて解釈することができるんです。」

この青年が当たり前のことを言っているような気も、そうではないような気もして、頭の中がこんがらがって何も言えないままでしたが、青年は続けた。

「つまりね、経験できなかった、しなかったという経験にさえも、人は意味を見出せるんですよ。そして、そこに意味を見出せる強さにこそ、成長が、深みが、美しさがある。僕はそれに気付いたんです。」

「は、はあ。すみません。分かるような、よく分からないような感じです、今。」

「ハハハ、僕の持論なんでね。」

戸惑う私に、青年はからからと笑う。

「僕は、今あるこの僕をここまで楽しめるのは、闘病をして、するはずだった高校の経験をしなかった、その経験に、少し強くなった今の僕が、意味を見出せるからだだと、確信しているんです。」

少しずつ、漠然とだが、青年が何を言いたいのか分かってきた気がした。気がしているだけなので、自分の言葉で表すことはできないけれど。

「経験は、過去は、今を作る。これは一つの事実でしょう。でもね、経験や過去よりも、ずっと強い存在があるんです。それが、今の自分。」

青年は真つ直ぐな瞳で、沈みゆく夕日を見つめていた。

「だから経験を再配達するのは違うと、そう思ったということですか。」

「はい。今の自分の、強さがあれば、再配達は不要、むしろ人を邪魔してしまいますから。」

そう言い切って、青年は自分の腕時計に目をやった。

「おっと、すみません。油を売りすぎてしまいました。何はともあれ、千夏ちゃん的笑顔が見れたこと、嬉しかったですよ。この仕事をやって良かったと、最後に思えた。本当に、ありがとうございます。」

青年は頭を下げ、暗くなった外へと去っていった。青年の言葉を一つ一つ思い出しながら、夕飯の準備を千夏が食べたいと言った唐揚げ作りを始めたのだった。

青年は、星が瞬く夜道を歩きながら、腕にかけた、まだ開いていた方の鞆の口を静かに閉じた。

最後の最後に、再配達しなかった経験を再配達することができた。

僕が、僕自身に。

三年前、星さんに、千夏ちゃんに、小学校の体育祭を再配達するはずだった。

できなかった。僕の病気が再発したから。星さんが再配達を心待ちにしていたことは、事前に受け取った手紙の文面からもよく分かっていった。退院したら、まず星さんに再配達しようと思っていたが、叶わなかった。千夏ちゃんは、僕が入院している間に、僕よりも先にこの世界を去ってしまったから。

この経験をどのように捉えることもできただろう、僕次第では。しかしながら、この経験を前向きに捉えられる強さを、僕はまだ持ち合わせていなかった。

でもこれで本当に最後。再配達はもう終わり。もっと強く。濡れた頬を拭い夜空を見上げて、青年はひとり、星さんに自分が話した言葉たちを、何度も何度も反芻していた。